

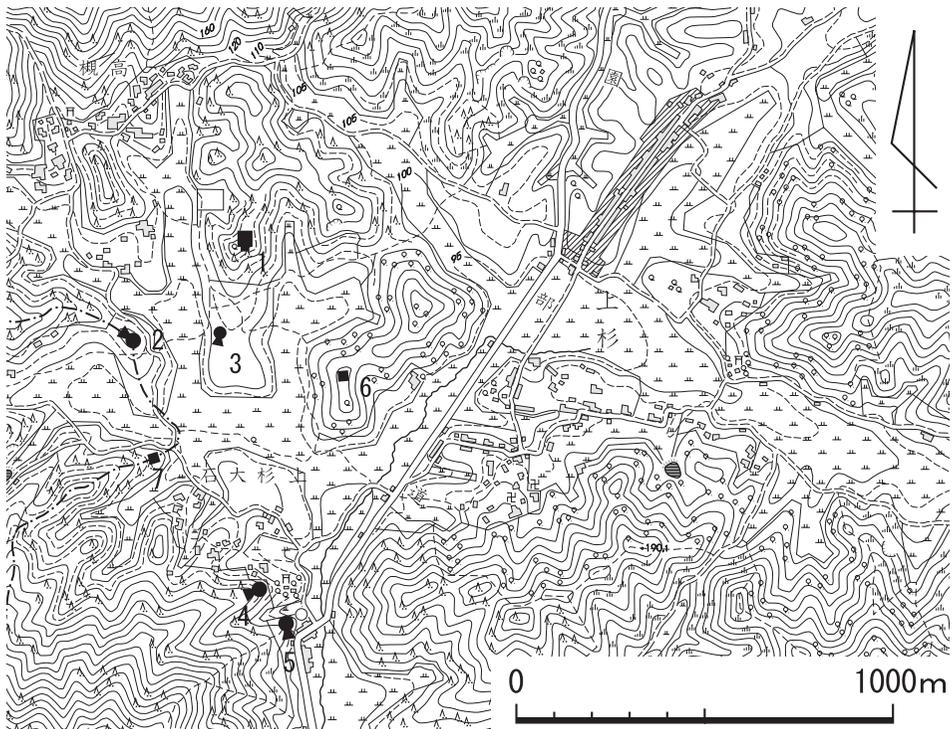
# 支配権の分割

## —京都府綾部市上杉4号墳の測量調査から—

三好博喜

### 1. はじめに

前稿『京都府埋蔵文化財論集』第5集では由良川中流域の前方後円墳のあり方を概観し、綾部市域に多くの前方後円墳が存在することを確認した。<sup>(注1)</sup>そして、河川の流域毎に幾つかの系譜があることを指摘した。そのなかで、八田川上流域で発見した上杉4号墳については、未報告のため後日改めて報告するとした。本稿では、上杉4号墳を紹介するとともに、小地域における前方後円墳の系譜の意味することについての仮説を提示し、今後の調査研究のひとつのテーマとなることを期待する。



第1図 八田川上流地域主要古墳分布図

(明治28年大日本帝国陸地測量部東八田村1/20,000をトレースして使用)

- 1.高槻東山1号墳 2.高槻茶臼山古墳 3.野崎5号墳 4.上杉4号墳 5.上杉1号墳  
6.今北3号墳 7.奥大石2号墳

## 2. 上杉4号墳の位置と測量調査

上杉4号墳は2005年(平成17)2月14日、踏査により新たに発見された前方後円墳である。京都府綾部市上杉町奥山に所在し、京都府北部を流れる由良川の支流である八田川上流域に位置している。八田川上流域は標高約100mの谷中分水界を経て舞鶴湾へと注ぐ伊佐津川水系へつながる。その谷中分水界には上杉盆地と呼ぶごく狭い小盆地がある。

上杉盆地の南には高城山と呼ぶ標高298mの山塊がある。高城山の山裾には襞状に小さな尾根筋が幾筋も派生しており、その北東側の尾根筋先端部に上杉4号墳は位置する。標高約130m、直近の平地との比高は約30mである。墳丘は後円部を盆地側へ、前方部を丘陵側へ向けて造られている。

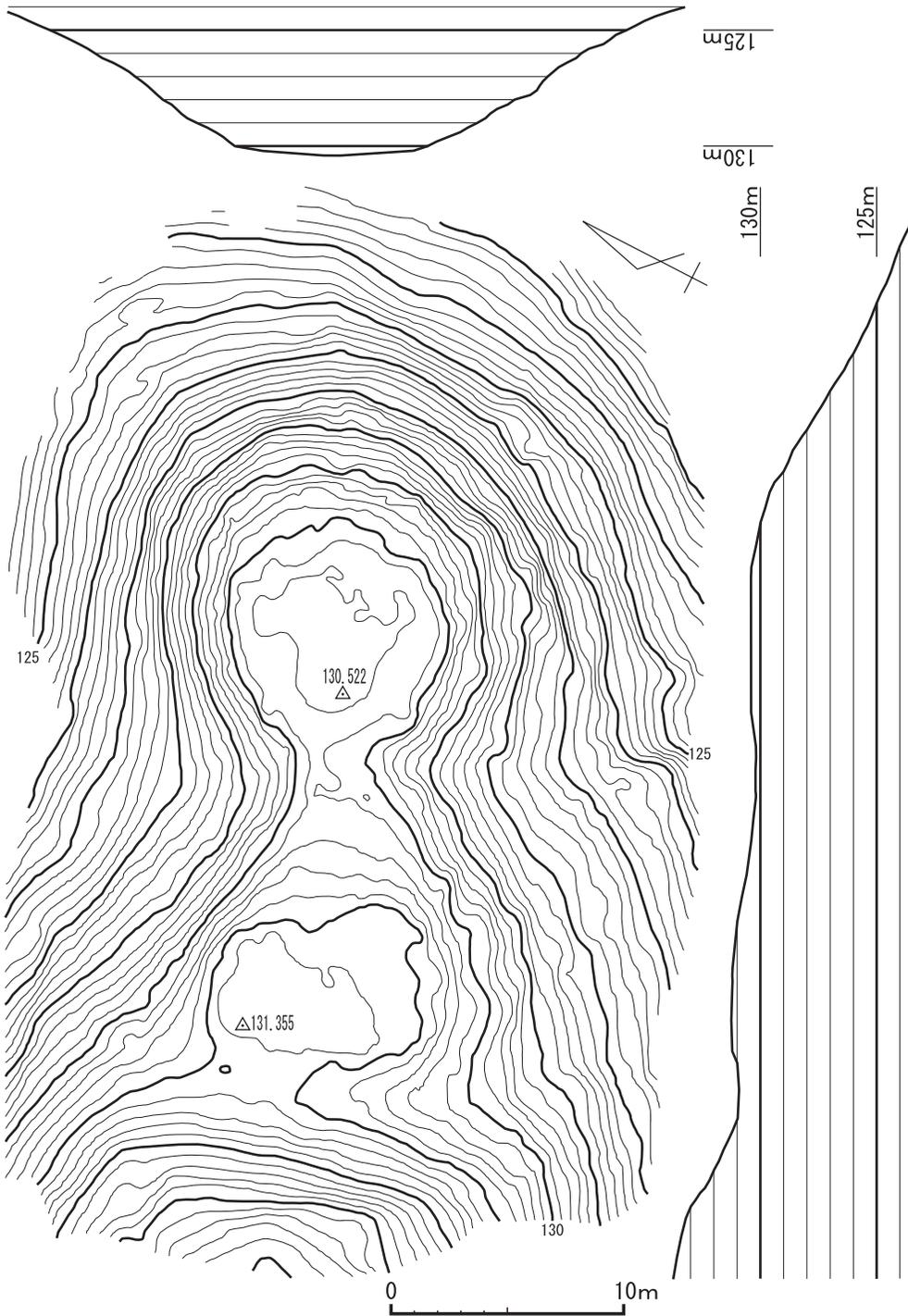
丘尾切断によって墳丘を構築しているが、切り離し溝が浅く、目視では前方部前端の状況が明確に捉えられなかった。このため、詳細な情報を得ようと2005年(平成17)2月から3月のうち延べ6日をかけて地形測量を試みた。測量調査はトータルステーションで3次元座標を記録、GISソフトを使用し、コンピューター上で等高線を発生させるやり方採った。傾斜値分布の解析も同ソフトによる。以下ではこの測量によって得られた知見を列挙する。

## 3. 上杉4号墳の墳丘測量図から

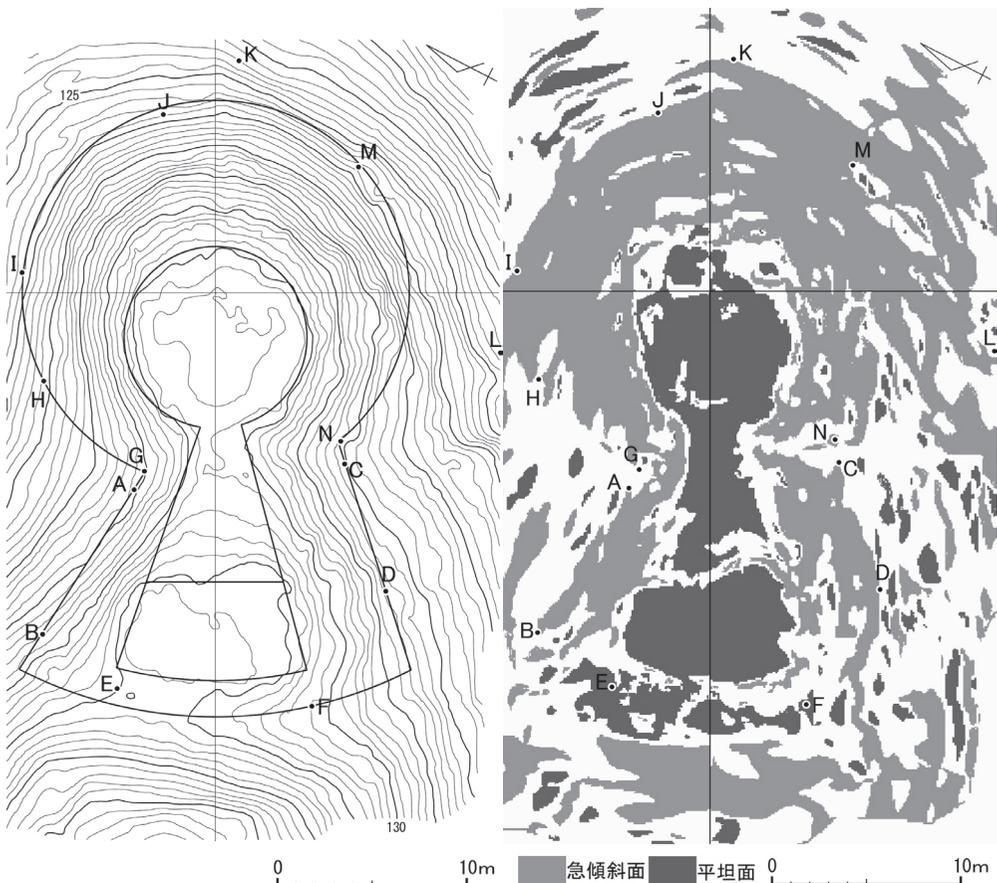
第2図に墳丘測量図を提示し、第4図に傾斜値分布を示した。

前方部について観察する。墳丘北西側くびれ部A(129mコンター付近)から前方部北西側前端裾B(129.6mコンター付近)にかけて9m余りにわたって傾斜変換点が直線的に認められる。墳丘南東側くびれ部C(128mコンター付近)から前方部南東側前端裾D(128.6mコンター付近)にかけては7m余りにわたって傾斜変換点が直線的に認められる。前方部前端面は、ごく浅い切り離し溝によって確認できる。丘陵部側は2m余りの高さをもつ切り岸となるが、墳丘側は0.3m余りで明瞭さを欠く。尾根筋を断ち切って墳丘を構築していることは明瞭ではあるが、現況では墳丘裾の傾斜変換点は明確にはみつけれない。現状では切り離し溝の底のラインEからFを前方部前端とした。

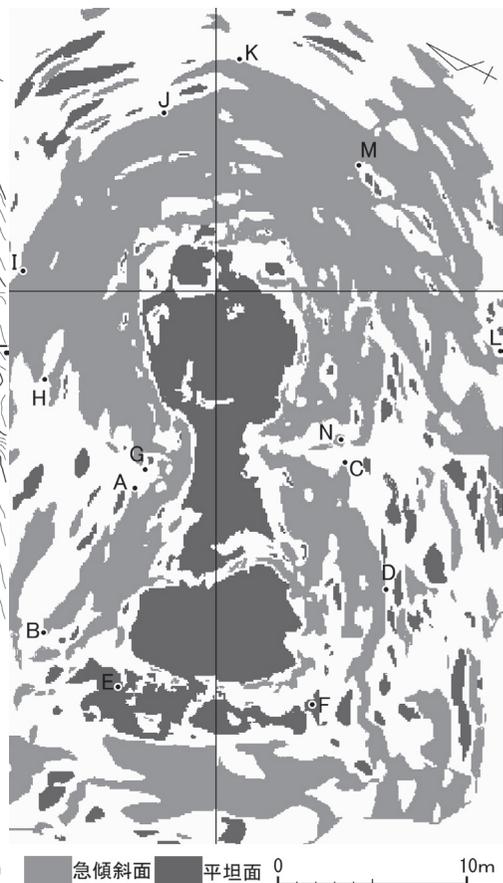
後円部について観察する。後円部北西側では比較的明瞭に傾斜変換点を追うことができる。墳丘北西側くびれ部G(129mコンター付近)から後円部西側裾H(127mコンター付近)にかけては緩斜面となる部分が若干混じる。北西側HからIでは傾斜がきつく丘陵斜面と墳丘裾との区別がつかない。北側IからJでは125.8mコンターに沿って傾斜変換点が明瞭に認められる。東南方向(KからL)は124.4mコンターに沿って明瞭な傾斜変換点が認められるが、南東部くびれ部へは続かず、墳丘裾というよりは丘陵裾とみなしたほうがよ



第2図 上杉4号墳墳丘測量図



第3図 墳丘復元図



第4図 傾斜値分布図

かるう。一段上がった斜面内MからNには狭い平坦面や緩斜面が断続的にくびれ部へ向かって続いており、これらが傾斜変換点となる可能性が高い。

墳頂部平坦面の復元は容易である。後円部平坦面は直径約9.6mで、最高部130.922mである。前方部平坦面は130mコンターラインで囲まれる区域に9m×5.5m程の長方形区画を設ける。最高部131.355mである。後円部と前方部とをなだらかなスロープでつなく。前方部と後円部の比高は約0.4mで、前方部がやや高い。後円部墳頂には石組み基壇があり、かつては小さな祠が祭られていたものと思われる。墳丘南西くびれ部には丘陵裾から里道が取り付く。

以上の点を考慮して第3図に墳丘復元図を提示した。規模などは以下のとおりである。

全長は約32.8mある。後円部は直径が約20.5m・高さが約5m(北側最高位)ないし2.5m(東側くびれ部から)ある。前方部は長さが約15m、幅が約20.5m、高さが約3.3m(東側く

びれ部から)ないし0.2m(前方部前端面)である。主軸の方向は磁北に対して前方部が西へ117度振っている(N-117°-W)。

墳丘は丘尾切断・削り出し、一部盛土によって築造されたものと思われる。表面観察した限りでは葺き石・埴輪列などの外表施設、段築は確認していない。埋葬主体部の構造についても不明。採集遺物などもなく、築造時期は不明である。

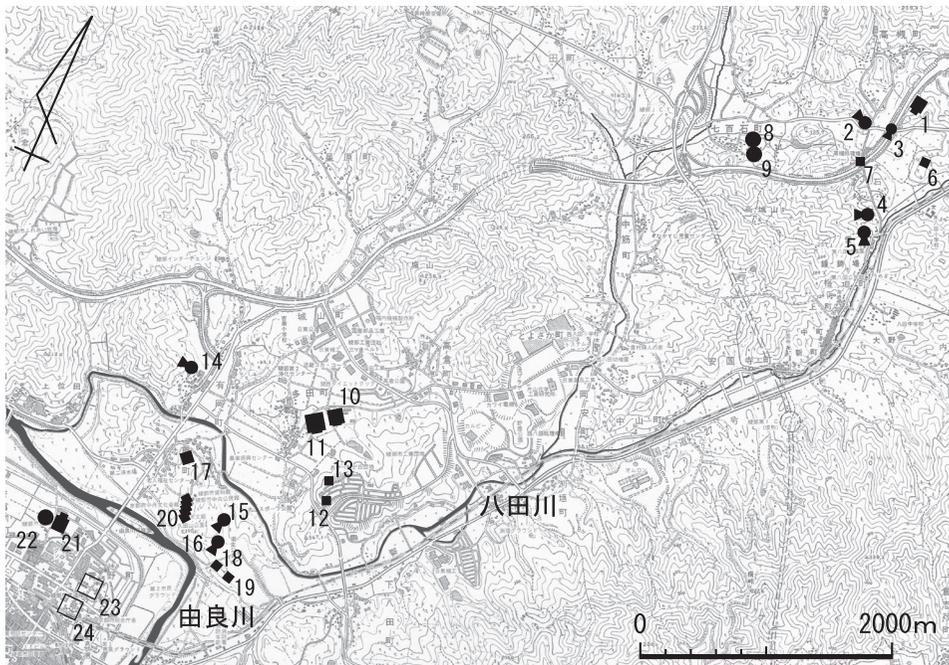
#### 4. 上杉4号墳の位置づけ

由良川中流域では明確な丘尾切断方式を採用している前方後円墳は須波伎東古墳・稲荷山古墳・上杉4号墳・桧山5号墳・男塚古墳がある。このうち稲荷山古墳・上杉4号墳・桧山5号墳・男塚古墳は墳形が極めて類似している。稲荷山古墳・上杉4号墳・桧山5号墳は、前方部がせり上がるか後円部とほとんど同じ高さを呈する。稲荷山古墳・上杉4号墳・桧山5号墳は内部主体の状況は把握されてはいないが横穴式石室墳ではない可能性が高い。桧山5号墳でTK10前後の須恵器を採集していることから、いずれも後期前葉に位置づけたい。以久田野78号墳は丘尾切断方式は採らないものの、やはり墳形が近似する。以久田野78号墳では川西編年V期の特徴をもつ埴輪が採集され、埋葬主体部が堅穴系と予測されることから、後期前葉に位置づけられる。こうした近隣の状況からすると上杉4号墳の築造時期は後期前葉と推測できる。

上杉盆地では現時点までに首長墳と考えられる前方後円墳4基(上杉1号墳・高槻茶白山古墳・野崎5号墳・上杉4号墳)と前方後方墳1基(高槻東山1号墳)の存在が知られている。前方後方墳である高槻東山1号墳は前期の可能性が高い。上杉1号墳は、横穴式石室を内蔵し、人物埴輪を出土したことから後期中葉に位置づけられている。高槻茶白山古墳は未調査であるため内容が判然としないが、採集された須恵器から中期末から後期初頭の築造とされてきた<sup>(注2)</sup>。野崎5号墳は発掘調査で確認されたものの、削平を受けており時期を特定しがたい。周囲の状況から中期末とされるが、古墳群を形成する点で高槻茶白山古墳に後続する可能性がある。上杉盆地は東西2km×南北1km程度のきわめて狭い盆地で生産力もそれほど高いとはいえない。生産力からみて、前方後円墳が同時期に複数基築造された可能性は低く、高槻茶白山古墳→野崎5号墳→上杉4号墳→上杉1号墳という流れが想定できる。ここに6世紀を通した首長墳の系譜が確立できたといえよう。

#### 5. 八田川流域の情勢

ここでは下流域(由良川との合流部、由良川の左岸の青野・綾中地区を含む)をも含めた八田川流域の情勢を概観する。



第5図 八田川流域関係遺跡分布図(綾部市全図から)

- |                 |            |               |            |            |
|-----------------|------------|---------------|------------|------------|
| 1.高槻東山1号墳       | 2.高槻茶白山古墳  | 3.野崎5号墳       | 4.上杉4号墳    | 5.上杉1号墳    |
| 6.今北3号墳         | 7.奥大石2号墳   | 8.政次1号墳       | 9.政次2号墳    | 10.菖蒲塚古墳   |
| 11.聖塚古墳         | 12.岩谷1号墳   | 13.岩谷2号墳      | 14.松山5号墳   | 15.久田山F1号墳 |
| 16.久田山F3号墳      | 17.久田山C2号墳 | 18.久田山K2号墳    | 19.久田山K5号墳 | 20.久田山H支群  |
| 21.青野西遺跡SX49周溝墓 | 22.青野大塚古墳  | 23.何鹿郡(評)衙推定地 | 24.綾中廃寺    |            |

弥生時代後期末から古墳時代前期にかけてこの地域には前方後方型周溝墓(青野西遺跡SX49周溝墓)<sup>(注3)</sup>および前方後方墳(高槻東山1号墳)<sup>(注4)</sup>が1基ずつ存在する。前方後方型周溝墓から前方後方墳への発展過程は北陸地域などの調査研究から明らかにされている。京都府北部では前方後方型周溝墓と前方後方墳とが確認されている地域はほかにない。前方後方型周溝墓は八田川の下流域にあり、前方後方墳が上流域にあることから、古墳時代前期までは八田川流域は上下ともにひとつのまとまりをもった地域であったと理解できる。

古墳時代中期前葉には八田川下流域に菖蒲塚古墳・聖塚古墳が築造される。<sup>(注6)</sup>いずれも造出しをもつ大型方墳という特徴がある。こうした特徴をもつ大型方墳は近年丹波地域で確認される事例が増えている。聖塚古墳は一辺50mの方墳で、その影響力は由良川中流域に及んでいたものと考えられる。その本拠地は古墳の築かれた八田川流域にあったのであろう。当地域に見られる大型方墳の墳丘形態は、前代の前方後方墳から発展してきた可能性<sup>(注7)</sup>がある。

古墳時代中期中葉には由良川中流域に私市円山古墳が築かれる。これまで当地域では見

られなかった大型円墳である。八田川流域では政次1号墳(直径約40m)・2号墳(同)、青野大塚古墳(直径約23m)といった大型円墳の存在も見逃せない。政次1号墳のみ発掘調査されたが、築造時期を特定できる資料は得られていない。当地の状況から私市円山古墳築造前後に比定するのが妥当であろう。<sup>(注8)</sup> いずれも前方後方型周溝墓や前方後方墳の築かれた地点に近接しており、私市円山古墳が由良川中流域全体に影響力を及ぼしたと同じように、八田川上流域及び下流域の押さえとして政次1号墳・2号墳そして青野大塚古墳が築造されたものと理解したい。

八田川流域でも古墳時代後期になると前方後円墳が数多く築造される。上流域に4基、下流域に3基あり、それぞれの規模に大差はない。多くが未調査であり、内容は不明である。おそらく上流域・下流域にそれぞれに継続的に首長墳を築造する集団が登場し、支配権の分割がなされたものと思われる。

律令期に入ると下流域に程近い地域に何鹿(評)郡衙や綾中廃寺が建てられる。こういった施設は地方豪族本拠地に立地することが多いことからすれば、その源流は八田川下流域に本拠を置いた勢力にあるのであろう。

八田川流域は弥生時代末頃から古墳時代前期にかけてひとつのまとまりをみせ、古墳時代中期にかかるころまでにこの八田川流域の地域を本拠地として由良川中流域全域まで影響を及ぼすに至った。私市円山古墳の出現によりその影響力を失い、再び八田川流域地域まで押しもどされた。程なく上流域と下流域に支配権を分かつのである。それでも下流域には律令期に何鹿(評)郡衙が置かれ、なおも広域に影響を及ぼし続けるのである。

## 6. ひとつの仮説

八田川流域にひとつの勢力が生まれ、やがて拡張し、収縮する。そして分割されるのであるが、それでも広域の中心であり続ける流れが見えてきた。律令期には八田川河口には何鹿郡(評)衙や綾中廃寺が置かれる地域であり、八田川流域の支配者がその成立を支えたものと思われる。

八田川上流域は律令期には八田郷と呼ばれた地域であり、平城京木簡でもその存在を確認できる。「八田」は八田部に由来し、仁徳天皇の妃となった八田皇女のために定められた名代が八田部とされる。名代・子代の設置は、国造に属していた地方の民を割取して、その労働・生産力を皇族の諸費用に充てたものと見なされている。

八田川上流域もこうした記述に合致するとすれば、かつては国造が支配していた地域の民が八田部として分割された可能性がでてくる。分割された民の現地統率者の墓として築かれたものが八田川上流域の前方後円墳ではないだろうか。上杉盆地に最初に登場する高

槻茶臼山古墳は由良川流域では最も大きな前方後円墳である。上杉1号墳は数少ない埴輪をもつ前方後円墳でもある。上杉4号墳・野崎5号墳を含め、上杉盆地には狭小な割には注目すべき古墳が集まるのにはこうした背景が考えられる。

そして、国造の拠点は八田川下流域と想定できる。聖塚古墳の規模・内容など、国造の系譜に連なる首長の墓として遜色はない。下流域の前方後円墳の築造を経て、何鹿郡(評)衙や綾中廃寺の成立を迎えるのであろう。

## 7. おわりに

前方後方形周溝墓と前方後方墳が八田川水系の上流域と下流域に存在することから、弥生時代末期から古墳時代前期にかけてひとつの集団の支配下にあったものと予想した。その墳形を元に発展し、この地域を象徴するモニュメントとして築かれたものが古墳時代中期前葉の聖塚古墳であろう。この時期には八田川流域を越え、由良川中流域をもその支配下においたものと思われる。その直後の私市円山古墳の出現により、この状況が一変する。私市円山古墳の出現以降、定型化した前方後円墳が各地に台頭するのである。八田川流域も例外ではない。こうした八田川流域での現象を国造制・部民制から理解できないかとするのが今回の趣旨である。

(みよし・ひろき = 綾部市教育委員会)

- 注1 三好博喜「由良川流域の前方後円墳集成」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注2 古墳時代前期前葉に置く説もある。奥村清一郎「高槻茶臼山再考」(『京都考古』第94号 京都考古刊行会)2005
- 注3 近澤豊明「青野西遺跡第3次調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会)1989
- 注4 三好博喜「前方後方形周溝墓から大型古墳への系譜 - 高槻東山1号墳の発見を契機としての予察 -」(『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会)2008
- 注5 高橋浩二「北陸の前方後方墳 - 柳田布尾山古墳の時期的評価をめぐって -」(『石川考古学研究会々誌』第49号 石川考古学研究会)2006
- 注6 中村孝行『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会)1984
- 注7 注3に同じ
- 注8 山城考古学研究会『丹波の古墳 - 由良川流域の古墳 -』I 1983